

笛吹川水系 東沢 釜ノ沢東俣

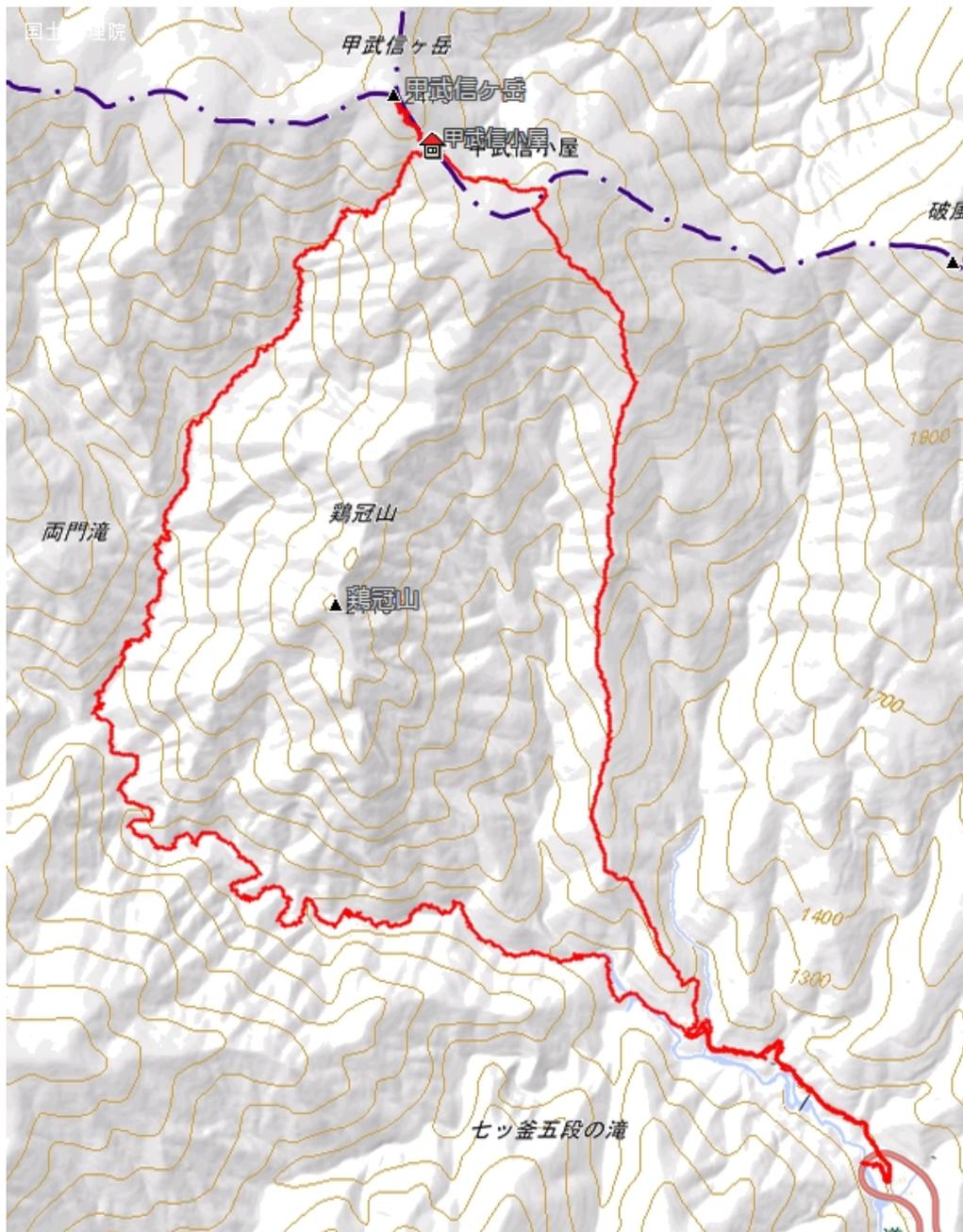
【日程】2021年7月22日～24日

【エリア】奥秩父（甲武信ヶ岳）

【形態】沢登り

【メンバー】Y (L)、O

【報告】O、Y



《ルート／タイム》

7月22日 晴れ後曇り 一時雷雨

駐車地 12:15～鶏冠谷出合 13:15～山の神（雨停滞 14:45-15:15）～乙女の滝（幕営） 15:50

7月23日 晴れ後曇り 一時小雨

幕営地 06:12～魚止の滝 07:30～両門滝 09:00～大ナメ滝下 11:50～甲武信小屋 13:00

夕刻・甲武信ヶ岳往復

7月24日 晴れ

甲武信小屋 06:15～戸渡尾根～徳ちゃん新道～駐車地 10:15

《報告》

7月22日

初の関東への沢遠征となる。昨年も企画をしていたが梅雨で流れてしまった。本来であれば1泊2日のルートであるが、1日目の早朝に奈良を出発することで2泊3日の余裕をもった行程となった。

朝5時に奈良を出発し、約6時間近くの移動。駐車地は無料。西沢溪谷は避暑地として利用される方も多いため、満車に近い駐車模様だ。鶏冠出合までは一般道を歩く、ここから沢へ下り装備履き替え。山の神までは左岸斜面をトラバースして行くが、狭隘な危険箇所が複数あった。



沢筋へ降りる分岐点



ホラ貝のゴルジュ

ホラ貝のゴルジュでは泳ぎの練習をするパーティと出遭う。山の神の小さな祠が見えてきたあたりで、夕立に遭遇。そばにあった岩屋でしばらくの間休憩とする。

雨が止み始めたころに行動再開、初日は乙女の滝の向かいの段丘（旧登山道だろうか、踏み跡がしっかりとある）で幕営とする。



山の神の祠がみえる岩屋で雨をしのぐ

7月23日

本日は沢遡行により甲武信小屋まで到着すること。

ゴーロ状の沢遡行の合間に東のナメ沢、西のナメ沢が見えてくる。また写真でよく見かける釜状の淵をへつる所では、滑って釜に落ちてしまった。

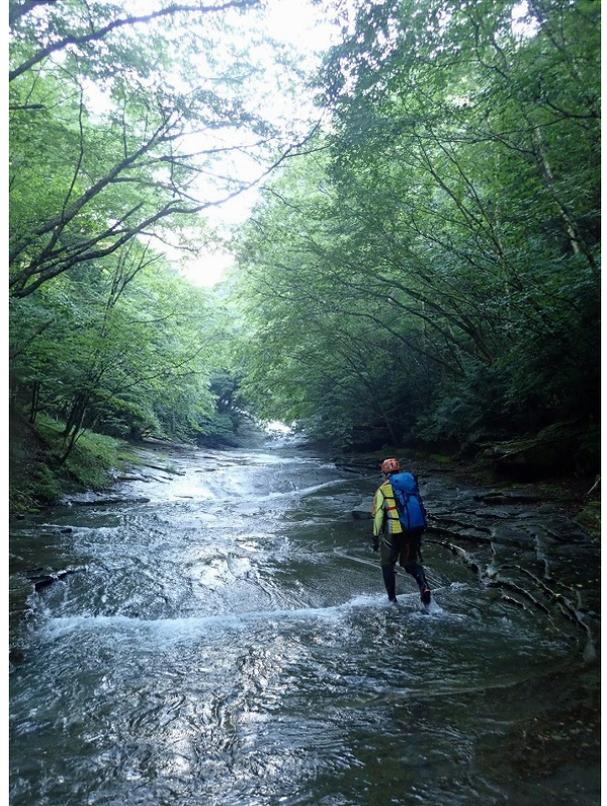
魚止ノ滝は右岸に目印テープが見えている。ショルダーでYさんが先行。そのうえで荷揚げを行い、続いて私が乗り越える。この後、ほどなくすると沢のハイライトともいえる千畳のナメが出迎えてくれる。



魚止めの滝。右岸スラブを登る



左岸をへつる



千畳のナメ滝。本ルートの名物シーン

西沢と東沢とが出合う両門の滝は右の東沢の滝を左岸巻き、つづくヤゲンの滝を乗り越えると、ふたたび単調なゴーロ状の沢となる。1700から1900のPまでは幕適地がところどころにある。このあたりで後続の若手パーティ7～8名に追い抜かれる。



両門の滝

1900を超えるあたりから、階段状のナメ滝がはじまりシャワークライミングの連続となる。一気に標高を稼げるのもこのあたりからだ。

大ナメ滝が見えるポイントからは左岸を巻いていくところだが、目印テーピングが分かりにくいところに隠れており、左岸を大きく斜面の方まで巻いてしまい、引き返す場面もあった。

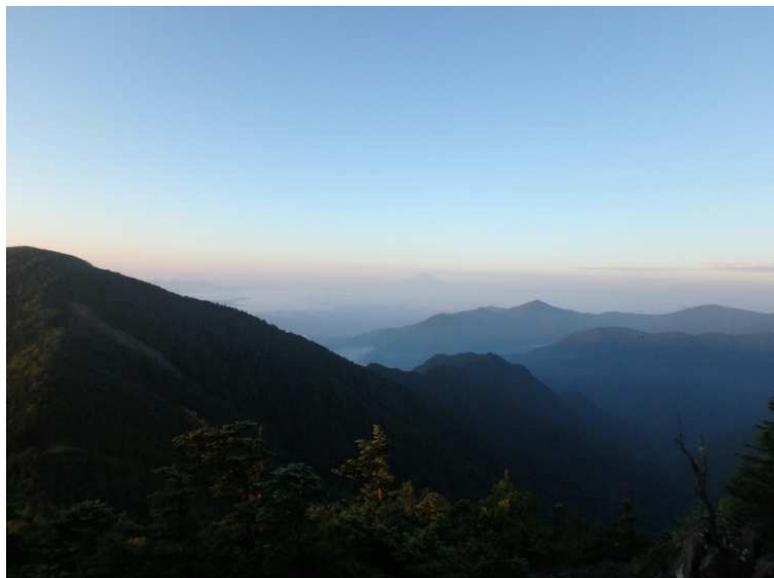
ここを越えると、沢筋は徐々に細くなるものの、甲武信小屋へ送水するポンプ小屋までは沢水がほぼ枯れることなく続いていた。ポンプ小屋から甲武信小屋までは約10分。

私にとっては12年ぶりの甲武信小屋となる。当時は毛木平から信濃川・千曲川の源流を遡り、甲武信ヶ岳へ乗り越すルートをとった。今回は笛吹川の源流を遡り、甲武信ヶ岳へ。ご存じの方も多いと思うが、さらに言えば荒川の源流も甲武信ヶ岳であり、東京湾へ流れ込む地理的に重要な河川だ。奥秩父の水源地を遡る旅ともいえるだろう。

天候はガスがかかっており、小屋で夕方のんびりとさせてもらうことにする。夕食後、山頂を往復。

7月24日

朝は快晴であり、日の出を拝むべく再び山頂へ向かった。東は雲海で、南には富士山、西には八ヶ岳連峰が見えている。朝日が射すと、硫黄岳山荘が輝いたのには驚いた。



富士山を望む

小屋前テラスでパッキングしていると、3代目の小屋番、山中徳治さんが登山客に話しかけていた。昨日遡行した東沢ルートについてYさんも山中さんと会話されていた。昭和57年ころに3代目を引き継いだそう。それまでは東沢ルートがメイン登山道であり、東沢から上がってきた登山客が甲武信小屋に泊まるために列を成したこともあったとのことだ。かつての2万5千分1地図には登山道として東沢が記載されていた記録も残っているから、相当の登山客がいたのだろう。



甲武信小屋の朝



戸渡尾根上の分岐。徳ちゃん新道を下る。

下山は徳治さんが開拓した徳ちゃん新道で。急坂も多いが、樹林に覆われており日差しもきつくなく、鶏冠谷から聞こえてくる沢音も心地よく、約3時間の尾根道下りを終えることができた。

下山後にYOUTUBEを検索しているとNHK深夜ラジオで山中さんが出演している記録が残っていた。今回の遡行を振り返りながら、先人の小屋運営に掛ける様々な苦勞などの思いを聞かせて頂いた。